

# 一枚の写真



*Mooicco9*

2017.8.11

## 一枚の写真

---

心のどこかにある一枚の大切な写真

探してもない写真

でも、その写真があるから、今生きていける。

僕は至って、普通の人間だ、特に秀でた能力もない、勉強もできる訳ではない。でも、僕は将来、仕事をしてご飯を食べていかなければならない。しかし全く何事にもやる気になれない。見兼ねた母が、カメラを買ってくれた。そして僕はこんなに世界は面白いものなんだと気づいた。

風に揺らぐ木々、光に反射する水たまり、暖かそうにそして寒そうに寝ている鳥。僕は外の世界を知らないようだ、家から少し歩いただけなのに、そこには生活があって、以外にも宇宙だった。人は外に出るといふ事は何かを求めて歩いている、仕事買い物、友達に会いに。僕は何も用がないけど、この街を歩いている、特に用も無いのにだ。僕は何もする事が無い、そして何をしたいのかわからない。太陽と道路はどこまでも続いている気がした。僕ってこんなにちっぽけなんだ。そして、生きるって大変なんだな。お父さん、お母さん、おねちゃん。飼っている犬。僕は生きていていいのだろうか？赤い自転車が通る。ふと、おばさんを振り返るように見る。きっとあのおばさんも、旅行かなんか行って、おみあげでも渡してきたのかな、なんか機嫌良さそうだし。そうするとおじいさん、おばあさんが手を繋いで歩いている。僕は思わずカメラを向けた。が、撮るのは辞めた。カメラはとても難しい、撮っていい物、撮ってはいけない物、今はスマホでなんでもありになりつつあるが。元々は撮らせて頂く物だ、相手の撮っていいよという許可が必要だ。でも、母がくれた、このカメラは僕に世の中を見てきなさいというメッセージが込められていたのかとここで気づいた。以外にも家で寝ているより元気だ。猫じゃらしを抜き取って、ひたすらに自分が行きたい方に歩く、道ってなんだろう？そうすると雨が降ってきたので、走ってコンビニまでたどり着いた。おデブのおばちゃんが面白い発音でいらっしゃいませーと言っていた。これが平和なんだと思った。僕は気づいた。愛という事。そうこのいらっしゃいませが幸せな事なんだと思った。僕は働いていない。学生だけど学校も行ったりいかなかったりだ。なんの為に人はいらっしゃいませと言って、ありがとうございしたと言って。お金を払い、物を買う。その根本にあるのはまとめてしまえば愛だ。愛があるから頑張れる。僕はコンビニで生きる事、幸せとはについてビックフランクを食べながらそれぞれが生きる事についての考え、また、なんか生きる喜びがコンビニでもあるなら、なんかやっつけいける気がした。そして、雨がやみ、僕は家に帰った。そして一枚の心の写真を撮った。なぜかその写真には家族全員がいて、いつものくだらない家族なんだけど、その時の家族はみんな笑っていて、いつもの風景だった。そして僕はこの心の写真を撮って、今から未来に向けて走り出す決意を決めた。きっかけは歩いて1

0分の光景なんだけど、以外にもみんな苦勞はあるけど幸せなんだと思ったからだ。変わるきっかけはそれだけど、僕は思うんだ、変わらない事なんてないって、時間と共に成長は誰だっける、むしろ変わらない方が遅れをとってしまう。大切な物、人は大切だ。これからも大切だ。でも、もっと大切な人、事があるかもしれない。今の僕にはわからないけど、今がつまらないなら、頑張るしかない、掴みたい未来があるなら掴んでやる。頑張る事は悪い事ではない。むしろ頑張らないと見たい世界は見れないという事だ。頑張らないと趣味も見つからない。過去の日記を見ると母のカメラから僕は生まれ変わっているのに気づく。僕は部屋の掃除を泣きながらして、大学2年の夏。自分の道へと進む決断をする。

日々だらけていたけど、なんとなく行っていた大学も真剣に話を聞くと楽しくなってきた。そして家でも猛勉強の日々が始まった。母にはどうしたの急に、なんて言われたが、お母さんのご飯が美味しいから、だから元気なんだよと言って、なるべく心配がないようにしていた。父はようやくスイッチ入ったな、頑張れよなんて言われ、いつかどこかで食事できるように頑張るよと言った。部屋のドアのパタンと閉まる音が柔らかくてなんだか安心した気分になった。そして僕も思った。人間やればできるってね。ただ勉強するのがダルいって思っているだけで、真実を暴きたいって思うんだけど。歴史や人間関係かな。だいたい真実を知るといい事はないし、意外に勉強して見ると面白い事が沢山あるって事。自分ってどんな事に興味があるのかな？とか考えて見るともっと自分を知れる。僕は勉強をしてつくづく良かったと思っている。

そして今でも勉強しているが、立派な社会人として働いている。生涯勉強で修行だ、そこから逃げれば明日はない。そうやって今が回っていると思うとあの時、僕が寝ているばかりなら、本当の意味で幸せを感じられなかったと思う。あの時マジボタンを押した事で今、幸せを噛み締めている。そして、カメラでは残せない大切な心の写真はだんだんと増して、あの時の僕でなく、喜怒哀楽と人生を楽しめるようになった。